



アメリカ留学日記

早稲田大学社会科学部 3年・Hope College に留学中

伊藤 直人



第2回目の今回は、今学期、自分がどのように留学生活を送っているかについて「チャレンジ」をテーマにして筆を執ってみることにします。

みなさん、いかがお過ごしでしょうか。ここフィラデルフィアにもようやく春が訪れました。時たま花冷えの日がありますが、とても過ごしやすい気候が続いています。

前回お伝えしたように、私はインターンシッププログラムを現在履修しています。具体的には、週1回行われる2つの授業に加え、残りの4日間で計32時間のインターンシップをしています。まるで働いている人みたいですね。

受講しているクラス

メインのインターンシップに触れる前に、クラスについて述べることにします。前回と重複するかもしれませんが、現在私が履修しているクラスは Power & Authority と The Architecture of cities です。どちらも毎回の授業が長い、学際的なクラスという点では共通しているのですが、内容はまったく異なります。前者は、クラスの内容がインターンシップと深くリンクしています。

自分を例に挙げてみますと、現在私は法律事務所でリーガルインターンをしています。つまり、1つの組織の中に自分の存在を置いていることになります。一般的に、どの組織または人間関係にも「力と権力」の構造が見え隠れしています。簡単な例として、上司と部下（肩書き）の関係あるいは同じ肩書きでも社会的差別（年齢、性別、人種、宗教...）や性格によって生じる関係などです。そこでクラスの中では、リーディングやライティング、そして時にはフィールドトリップを通じて、私たちはなぜこのような構造が生まれるのか、どのようにしてこのような社会の中で生きていくべきなのかといった1つの専門分野では捉えきれない問題に対して理解を深めていっています。

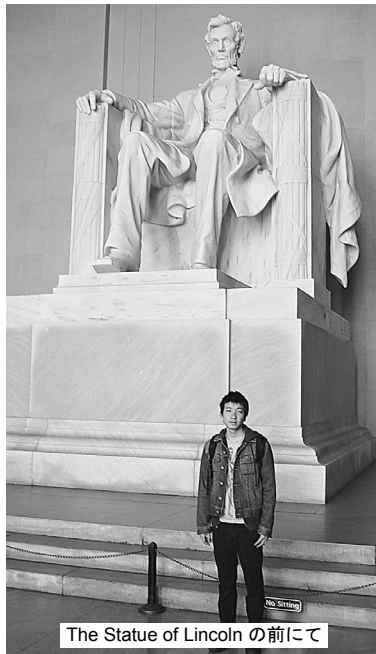
また、教授は授業の先生としてだけでなく、インターンシップを決める際のコンサルタントという役割も兼ねていて、一般的に言う、教授とは異なると思います。ですので、インター

ンシップが始まる前には毎日と言っていいほど、顔を合わせていたので、信頼関係を上手く築くことが出来ればものすごく頼れる存在になります。今のところいい関係が築けていると実感しています。

しかしながら、いつも最終的に引っかかるのが、「語学」の問題です。教授と話していて、私が何か不満そうな顔をしたりすると、彼が「私が日本語を理解できたらなあ。」と伝えられたときは、言葉に表しがたい状態になります。実際、私は、言うまでもなく留学生であり、他の留学生に比べると恥ずかしながら英語が堪能ではありません。しかし、だからと言って私は、語学が理由で引け目を感じるかと言えば、それはまた違う問題だと考えているので、割り切っています。言い換えれば、駄目もともないから、積極的に発言したりするよう心がけています。なぜなら周りの友達の方が、私が「留学生」であることを認識しているのは容易に察しが付くし、チャレンジするには絶好の機会だと考えているからです。この感覚はおそらく日本では味わうことが出来ないと確信しています。

後者のクラスに関して少しだけお伝えしておきますと、私はこのクラスが大好きです。

というのは、私は友達の影響もあってか、建築について興味がありました。周知の通り、フィラデルフィアはアメリカの歴史を知る上で非常に重要な位置を占めていますが、建築の歴史の変遷を知る上でも同じ事が言えます。19世紀から近代・現代作品が街中にちりばめられていて、街自体が1つのテキストになっているみたいです。クラスの中では実際にその作品を鑑賞するために訪れたり、街の成り立ちについて学んだりしています。個人的に、授業と言うよりは新たな趣味を見つける（チャレンジする）つもりで毎回受けています。



The Statue of Lincoln の前にて